

法真寺が発信する、お寺とお檀家さんのコミュニケーションマガジン

稲
附
新
聞

繫承

第17号

2021年6月発行

【本号の目次】

①鼎談 法真寺×かえで葬祭

②第四回 お祀り男 三十番神

法真寺 × かえで葬祭 鼎談 ― 葬儀のあれこれ ―

柿本.. 今回は法真寺の寺報の企画にかえで葬祭の井上さんが協力して下さいました。住職と井上さんは同級生という事を伺いましたがいつ頃知り合われたのですか？

住職.. 小学校の同級生なのですが、小学校の時は一言も喋ったことがないのでないか、というくらい希薄な関係でした。去年共通の友人が、僕が僧侶で井上が葬儀屋、住んでいるところも私が赤羽で井上が王子ということもあって、気を使って引き合わせてくれたんです。会ってみると井上は葬儀社を営みながら、プロゴルファーライセンスを持っているという異色の経歴の持ち主になっていました。

柿本.. 珍しい経歴ですね。井上さんはどういう経緯で葬儀会社に勤めたのですか？

井上.. 愛犬が亡くなり、父が亡くなり、命というものを身近に感じる機会に触れました。そこで通夜葬儀という空間の重みや大切さを実感しました。昔から母が葬儀の司会の仕事をしていたこともあり、自分もこの世界で仕事をしてみたいと思うようになりました。

柿本.. なぜ「かえで葬祭」という名前にしたのですか？

井上.. 「かえで」には大切な思い出という花言があります。思い出にしつかり添うことが出来る葬儀社でありたいと思い、この名前にしました。

柿本.. 井上さんの人柄が出ていますね。ここからは葬儀についてお話を聞きたいと思えます。私達僧侶が斎場に出向いた時には、



御宝前の準備が既に整えられています。宗派によって変わりますか？

井上…変わる部分と変わらない部分があります。日蓮宗の特徴としては木魚ではなく、木鉦を使うということですかね。あとは各宗派によってお線香の本数や長さの違いもあり、菊の葉を用意したり、灑水などを用いるご宗派もあります。神式においては焼香はしませんし、お供物に鯛を用意します。又、キリスト教においては十字架、燭台などの装飾の違いは仏式と大きく異なりますので、現場ごとに注意して確認をするように心がけておりますが、第一はやはりお寺様、神職様にご指示を仰がせていただいております。同じご宗派であっても全てが同じであるということとは少なくないです。

住職…日蓮宗では宗定法要式（葬儀や法要などの決まり事が記載されている本）というものがあって法要によって必ず準備するものが決められているんです。



かえで葬祭

井上 項音士さん (34)

住職の筑波大学附属小学校での同級生。小さな葬儀会社かえで葬祭を母と営む。真摯に、真心を込めて、安心できる葬儀社として遺族に寄り添う葬儀を行いたい。



用意される仏具には必ず意味がある。三つの必須アイテム「火・香・花」

住職..例えば三具足、五具足というものがあって三具足の場合は、本尊に向かって中央に香炉、右側に燭台を一つ、左側に花立を一つ置きます。五具足の場合は三具足に燭台と花立を各一つずつ足した物になっています。葬儀の場合は花祭壇が花立の代わりになっていますね。

柿本..私も準備の仕方はわかるのですが、それぞれのもつ意味ってよく知らないんですよ。
井上..当たり前のように準備するものですけど、なかなか疑問をもった事がなかったですね。

住職..まず、蠟燭をご供養に使う理由としては、不浄なものや穢れを祓い、浄める効果があることからきています。また蠟燭の灯はあの世とこの世の架け橋となります。ご先祖様が道に迷うことないように私たちとご先祖様を繋ぐ役割があるんですよ。

井上..蠟燭の火は道しるべになるということですね。では、線香や焼香にも同様に意味が込められているんですか？

住職..そうですね。お線香やお焼香は、香りを供養するためのに行います。そして、香りを備える供養には三種類あります。

- ・塗香（ずこう）：香を塗り身体を浄める。
- ・焼香（しょうこう）：香を焚いて供養する。
- ・華香（けこう）：生花をまいて供養する。

日本へは奈良時代に中国からもたらされ、最初は抹香（まっこう。粉末状のもの。一般的にお葬式で使われるもの）や練香ねりこう（合香あわせこう）のようなもので、体の臭い消しとして一般化していったんですよ。

柿本..塗香は私も信行道場（日蓮宗のお坊さんになるための修業機関。三十五日山に籠る。）で写経をする時に使ったことがありますね。独特な香りな





なので日常ではほとんど使う機会はないですが。
住職.. そうですね。お寺にいても中々使う機会はないですね。塗香が好きなお坊さんは色んな香りのものを集めている人もいますね。あまりお寺でも見ないものと言え、斎場に行った時、通夜でグルグル巻かれた線香が準備されている事があります。あれは何の為なんでしょう？

井上.. それは巻線香の事ですね。巻線香はお通夜の夜の寝ずの番をする際に使いますね。寝ずの番は、故人の唯一の食べ物と言われる線香の煙を絶やさないことで、故人がお腹を空かせて辛い思いをしないためにあります。また、蠟燭の灯りと線香の香りを道標に、故人が迷わずあの世にたどり着け

るよう手助けするためとも言われています。昔はご遺族や縁の深かった友人などが夜通しで故人の側にいて線香の煙を絶やさなかつたのですが、お身体の負担を考慮するためにも、燃烧時間の長い蠟燭や長持ちする渦巻き型の線香を利用して煙を少しでも長い時間絶やさないようにするために開発されたものです。

住職.. そうだったんですね。確かに普通の蠟燭や線香だとすぐに燃え尽きてしまつて何度も付け直すのは大変ですからね。

柿本.. 次にお花についてですが、供えるお花はどうして仏様の方でなく、自分達の方を向いているんですかね。



花がこちら側を向いているのは天皇によって大昔に決められたルール。



住職

・実はその理由も宗定法要式にかいてあります。これは平安時代に、宇多天皇が「向下相を用ゆべし」と仰つて以来、私達の方に花の表面を向け、お供えする事が習慣になつたと伝えられていますね。

花の供え方には

・「向上相」（こうじょうそう）・・・花の表面を仏様の方に向ける。

・「向中相」（こうちゅうそう）・・・花の表面を八方に向ける。

・「向下相」（こうげそう）・・・花の表面を私達の方に向ける。

という三種類の供え方があります。江戸時代、日蓮宗学を大成した代表的な僧侶、優陀那日輝（うだなにちき）上人はご自身の著『充治園禮誦

儀記（じゅうごえんらいじゆぎき）』にて、「供花」について、次の様に記されています。

「花は心気を和雅ならしむ。慧心を資（たす）くべし。」花の供養には、仏様を美しく立派に飾るといふ意味と共に私達、

花の供養をする側の心を整え、清める功德があるといわれています。

柿本

・私達、供養をする側にも功德を頂けるのということですね。

仏式とはいえ、日本の葬儀では仏教の教えだけでなく、風習や習慣が取り込まれている部分も多い。

住職

・次に、葬儀で準備される供物について井上さんに質問したいんですが、御霊供膳に置いてある仏飯に箸が刺されていますよね。あれはどういう意味があるんですか。

井上・・・膳飯（いちぜんめし）の事ですね。その理由は、突き立てた箸に「あの世

とこの世のハシワタシ（橋渡し）」という意味を込めているからです。立てた箸を通して、故人があつた世へ旅立つ手助けをする意味があります。

柿本・・・箸と橋がかけられているんですね。昔の人の発想って面白いですね。



井上…場合によっては一膳飯を盛つても箸を立てない場合もありますので、宗派や地域の風習にならった方がいいと思いますね。

お坊さんでもなかなか知らない、地域のローカルルール。

柿本…そうですね。私の地元の長崎では出棺の時に故人が使っていたお茶碗を割る習慣があります。

あまりよくないように聞こえますが、茶碗割りが行われるようになった理由については、故人の魂をあのお世へと送り出す意味合いがあります。故人が生前愛用していた食器を割ることで食事をできない状態にし、故人の現世への未練を断つてあげるといふ考えです。また、故人の死出の旅路に愛用の品を一緒に持たせてあげたいという故人を思いやる気持ちもあつた

みたいですね。さらに、茶碗割りには遺族が気持ちを整理するといふ意味合いもあります。遺品を割ることで、悲しみに一段落をつけるという訳です。土葬が主流だった時代、故人の持ち物を壊すことで、別れを意識づける意味合いもあつたのかもしれないですね。

住職…地域によって本当に違いは大きいですね。遠い地域の葬儀に参列するとびっくりすることがありますね。

井上…勉強になりますね！



長崎平戸出身の柿本上人

対談を通して

柿本.. 今回の対談を通して、蠟燭や線香、お花等どれをとっても一つ一つに歴史や意味があることがわかりました。そして、それら全てが故人や遺族のためを思って成り立っているものであり、先人達の込められた思いやしきたりを今の私達が受け継ぐことで今後より一層、御供養への気持ちが入められると感じました。

井上.. 今回のような場もたせて下さった矢澤住職、柿本上人には心より感謝申し上げます。今後、かえで葬祭をご指名の節は迅速かつ、明瞭なご対応を取らせていただきます。どんなことにもできるかぎりご対応させていただきます。ぜひご一報下されれば幸いに存じます。

住職.. こうして小学校の頃の友人と葬儀について話をすると日が来るとは思ってもいませんでした。縁とは不思議なものだと感じます。現在葬儀の流れは、病院などで紹介された面識のない葬儀社が執り行うことが多くなっていますが、今後、かえで葬祭がご縁を広げて法真寺の檀信徒から信頼を獲得し、心強いパートナーとなってくれることを期待しています。



三十番神

お祀り男

第4回



石清水八幡宮

◇御祭神 八幡大菩薩
(はちまんだいぼさつ)



石清水八幡宮は、京都府八幡市八幡高坊の男山の山頂にあります。

石清水八幡宮の御祭神は、誉田別尊（ほんだわけのみこと）
|| 応神天皇（おうじてんのう）・比売大神（ひめのおおかみ）
・息長帯姫尊（おきながたらしひめのみこと）
|| 神功皇后（じんぐうこうごう）の三柱です。この三柱を総称して八幡大菩薩といえます。

八幡大菩薩は男山に御鎮座され、都の守護神、国家安泰の神として朝廷はもとより広く国民に篤い崇敬を受けてまいりました。特に清和天皇の嫡流（ちやくりゅう）である源氏一門は八幡大神様を氏神として尊崇し、その信奉の念は格別で全国各地に八幡大菩薩を勧請しました。源義家（よしいえ）は石清水八幡宮で※元服し自らを「八幡太郎義家」と名乗ったことは有名です。以来、国家鎮護、厄除開運、必勝・弓矢の神として時代を超えて人々の篤い信仰を受けてきました。※元服…奈良時代以降の日本で成人を示すものとして行われた儀式

上賀茂神社

下鴨神社

◇御祭神 加茂大明神

(かもだいまいようじん)

加茂大明神は、神山(こうやま)を御神体として上賀茂神社(かみがもじんじゃ)・下鴨神社(しもがもじんじゃ)の主祭神である別雷命(わけみかずちのみこと)・建角身命(たけつぬのみこと)・建玉依姫命(たけたまよりひめのみこと)が合体して、加茂大明神と総称された神様であります。

天地自然を司る大神様として信仰されており、京都の鬼門(北東)を守る神様としても仰がれています。

上賀茂神社の主祭神の加茂別雷神(かもわけいかずちのおおかみ)は雷の御神威により、厄を祓いあらゆる災難を除く、厄除け明神・落雷除・電気産業の守護神です。また鬼門の守り神や、地主の神として尊崇されています。



(かもだいまいようじん)
加茂大明神



下鴨神社には東殿に建玉依姫命(たけたまよりひめのみこと)と、西殿に加茂建角身命(かものたけつぬのみこと)がお祀りされています。加茂建角身命は、神武天皇が東征の時、天照大神らの命を受けて天降り、熊野から大和への難路を八咫鳥(やたがらす)と化して天皇を導いた神様です。建玉依姫命は、加茂建角身命の姫で、玉依姫命の神婚によって生まれたのが上賀茂神社の祭神の加茂別雷命です。

松尾大社

◇御祭神

大山咋神

(おおやまいくのかみ)

市寸島姫命

(いちきしまひめのみこと)



(まつおだいまいようじん)
松尾大明神

松尾大社は京都市西京区嵐山宮町の松尾山の麓にあります。現在の本殿は室町時代初期の応永四（一三九七）年に建造されたものです。本殿は松尾造りと称されていて、重要文化財に指定されています。

松尾大社の祭神は、大山咋神（おおやまいくのかみ）と市寸島姫命（いちきしまひめのみこと）の二神です。

大山咋神は山の上に鎮座して山および山麓一帯を支配する大主（おおぬし）の神であります。

市寸島姫命は、福岡県の宗像大社（むなかたたいしゃ）に祀られている三女神の一神で、安芸（あき）の国の厳島神社に祀られている厳島弁財天（いつくしまべんざいてん）です。この姫神は古くから海上安全の霊徳があると仰がれていました。この二神を松尾山の神霊と合体させて松尾大明神といます。御神徳は古来、開拓・治水・土木建築・商業・文化・寿命・交通・安産の守護神として仰がれ、京都洛西の総氏神として崇敬されています。



大原野神社

◇御祭神 大原大明神
（おおはらだいまょうじん）

大原野神社は、京都市西京区大原野南春日町にあります。大原大明神は藤原氏の氏神である春日大社の四つ柱の大神と、京の西山といわれる大原山に古くから祀られていた山神と合体した大神様です。

第一殿には建御賀豆智命（たけみかかずちのみこと）、第二殿には経津主命（ふつぬしのみこと）、第三殿には天之子八根命（あめのこやねのみこと）、第四殿には比咩大神（ひめおおかみ）が祀られています。

建御賀豆智命は、天孫降臨に先立って、天照大神の命を受け経津主命と共に出雲に趣き、大国主命と交渉し、その子、建御名方神（たてみなかたのかみ）を屈服させて国護りの大業を成し遂げた神様です。ですから建御賀豆智命と経津主命は、国造りに活躍した神々で、日本の国を守って頂く重要な役目をお持ちになっておられます。天之子八根命と比咩大神は東大阪市の枚岡神社（ひらおかじんじや）から春日大社に遷座されたと言われています。



（おおはらだいまょうじん）
大原大明神





春日大社

◇御祭神 春日大明神
(かすがだいみょうじん)

春日大社は奈良市春日野の三笠山の麓、つまり奈良公園の中の深い林の中にあります。本殿は文久三（一八六三）年に再建されたもので国宝になっています。



浮雲（うきぐも）の峯（みね）に鎮まりになりました。その後この第一殿は今の御蓋山の麓に移され、第二殿に香取神御蓋山の麓に移され、第二殿に香取神・経津主命（ふつぬしのみこと）がお祀りされました。この両命（みこと）は、天照大神の命を受けて、国護りの大業を成し国造りに活躍した神々で、日本の国を守る重要な役目を持つておられます。藤原氏はこの神々を氏神としてお祀りしました。更に第三殿、第四殿には、天照大神が天の岩戸にお籠もりになった時、その前で祭事を行なった神様で、河内国枚岡神社（こうちのかくにひらおかじんじや）に祀られている天児屋根命（あめのこやねのみこと）と比売神（ひめがみ）が勧請されています。この四殿の四神と御蓋山の三神と合体して、春日大明神といえます。

鹿島に祀られている武甕槌命（たけいかづちのみこと）は、神鹿の背に乗って奈良に来て、御蓋山の山頂

